

リアルな交流行事が及ぼす効果

—青森県 S 中学校参加者の意見から—

○吉原 さちえ（東海大学）

キーワード：「対面と非対面（オンライン）」「交流行事」「世代間」

【1】背景と目的

平成 28 年 12 月 21 日中央教育審議会答申では、たくましく未来を生きる子供たちを育成するためには、生涯にわたる学びの基盤となる資質・能力をしっかりと発揮できるようにしていくことが重要であるとした¹⁾。子供たち一人一人が、社会の変化に受け身で対応するのではなく、主体的に向き合って関わり合い、自らの可能性を発揮し多様な他者と協働しながら、よりよい社会と幸福な人生を切り拓き、未来の創り手となるために必要な力を育むことが求められている¹⁾。令和 3 年 1 月の中央教育審議会答申では、「生きる力」をより具体化し、教育課程全体を通して育成を目指す資質・能力を、三つの柱に再整理した¹⁾。さらに各教科等の目標や内容についても、三つの柱に基づいた再整理を図るように提言がなされた¹⁾。三つの柱とは、「何を理解しているか、何ができるか(1)※」、「理解していること・できることをどう使うか(2)※」、「どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか(3)※」である¹⁾。また、総合的な学習の時間で育成することを目指す資質・能力について、「知識及び技能(1)※」、「思考力、判断力、表現力等(2)※」、「学びに向かう力、人間性等(3)※」という三つの柱から明示された¹⁾。

青森市 S 中学校の生徒と神奈川県 T 大学の学生の交流は、日本で新型コロナウイルス感染症が流行した 2020 年から始まり、そのきっかけは、S 中学校と T 大学の教員同士の繋がりである。S 中学校の校訓は『恕』、教育目標『自律貢献』である。『恕』とは、孔子の言葉であり、「思いやり」という意味を持つとされる。「思いやり」とは、人の気持ちを考え、人からしてもらっていることに気付き、感謝の気持ちをもつことであり、自分自身を大切にするとともに、他者に対しても、大切に思うことができる人になってほしいという願いが込められている²⁾。『自律』とは、自分の羅針盤を持ち、自分の意志で方向づけをして進んでいくことができるように、自分で考え・自分で判断し・自分で行動できる、主体的な生徒の育成を目指していくとし、『貢献』とは、他の人のために行動することで、自分自信の存在を実感し、自分を高めていくことに繋がり、自分と他者との関係の中で、自分に自信をもって生き生きと生活できる生徒の育成を目指す²⁾とされる。

このような S 中学校の校訓や教育目標に加えて、「学び続ける」「互いを思い合う」「心身を鍛える」生徒像を目指していること、中学校での教育活動が「社会とつながる学び」であると意識していることが、生徒と学生間の交流の基本的な考え方に見合ったため、現在も交流の機会の継続に繋がっている。交流行事は毎年 1 回である。2020 年～2022 年の 3 年

間はリアルでの交流は困難であったため、非対面（オンライン）で互いの交流を図った。2023年5月に新型コロナウイルス感染症が5類に移行したことで、ようやく対面（リアル）での交流行事が実現できた。交流行事後は、教員を通じて感想や意見を交換することで交流行事内容のフィードバックでき、次回の交流に向けて改善や新たな試みを実現に繋げている。生徒から寄せられる感想や意見は、非対面時と対面時の各交流がもたらす影響を含んでいるのではないかと考えた。このことから研究の目的は、非対面時（オンライン）と対面（リアル）時の交流が子供たちにもたらした効果を明らかにすることとした。

【2】方法

4年間交流を継続している青森県の青森市S中学校の生徒と神奈川県T大学の学生が、研究の対象である。研究の方法は、2022年の非対面（オンライン）交流と2023年の対面交流後、教員を通じて寄せられた青森市S中学校の生徒の感想や意見の内容を分析し、検討考察することである。

【3】結果と考察

今回の研究を通して得られた結果は3つである。1つ目は、非対面の交流はオンライン方法であるが、画面越しに伝わる学生の表情や言葉は、少なからず何らかの刺激を生徒に与えている。2つ目は、対面の交流はグループディスカッションや身体活動を伴うことで、学生との直接的な触れ合いができ、生徒の共感力に繋がっている。3つ目は、世代を超えた交流かつ離れた地域の交流は、生徒にとって新たな希望や積極性を生み出していた。次に、これらの結果から考察されることは2つある。1つ目は、非対面ではあるもののオンライン方法での交流は、相手の表情や声が直接的に見たり聞いたりできることで、交流の目的や内容によっては、結果や効果が期待できるのではないかと推測される。2つ目は、対面での交流は、交流内容に関わらず、五感を伴う身体活動であり、直接的な触れ合いを通して共感する力がその場で得られるのではないかと考えられる。

【4】結論

リアルな交流が生み出す効果を図るために、コロナ禍とコロナとの共生に移行時に行われた青森市S中学校の生徒と神奈川県T大学の学生による交流行事に着目し、交流後の中学生の感想と意見から、非対面と対面の交流が中学生にもたらす効果を紐解いた。これからの社会を生き抜く子供たちにとって、リアルな交流は、それぞれの五感に響く活動となるため、共感する力が芽生えるとともに、自己への気づきや他者への理解に繋がることが期待できる。

<参考資料・文献>

1) 令和4年3月 文部科学省 今、求められる力を高める総合的な学習の時間の展開 未来社会を切り拓く確かな資質・能力の育成に向けた探究的な学習の充実とカリキュラム・マネジメントの実現 https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/sougou/20220426-mxt_kouhou02-2.pdf

2) 青森市新城中学校ホームページ 校訓 教育目標

<http://www.aomoricity.ed.jp/shinjyouchu/profile.html>（最終閲覧日:2024年2月16日）